

若者がつむぐ古志原の絆 ～ヤング古志原の活動をとおして～

松江市古志原公民館

1 古志原地区と古志原公民館の概要

古志原地区は、松江市の南東部に位置する住宅地で、幼稚園、小学校、高等学校がある文教地区でもある。

人口は約 13,000 人、世帯数は約 6,000 世帯であり、近年、少子高齢化が進展し、高齢化率は約 30% になった。

古志原公民館は昭和 56 年に開設。指定管理者制度による公設自主運営の公民館として、安全・安心、福祉、子育て、青少年育成などの地域課題を「目的縁」として地域縁と融合させた取り組みを進めている。

2 事業の趣旨

次世代を担う若者の地域活動、公民館活動への参加を促進するため、公民館が核となって若者グループ「ヤング古志原」を育成した。多世代・各種団体との交流機会を提供することにより若者の地域活動への参加を促進する。特に地域諸団体と連携して地域創生に結びつく事業を推進することを通して地域の全ての世代の交流を促進し、地域の活性化を図る。

3 具体的な取り組み内容

会員の自己実現と地域貢献を活動理念として、精力的に活動を推進してきた。会員の多様な意見をとり入れ、楽しく活動する事を中心に据え、無理のない活動を展開した。

(1) 地域活動への参加

地域活動に積極的に参加し地域の信頼を得た。

ア ふるさとまつり参加

屋台の各ブースに入り、ボランティアや地域住民と交流した。

イ 小学生キャンプ支援

テント設営、竹コップと箸の製作指導、炊飯活動支援等を行った。

ウ だんだん夏踊り参加

「松江だんだん夏踊り」に参加し、高齢者等と交流を通して活動を楽しんだ。

エ 公民館まつり参加

実行委員、協力団体として参加し、ステージ係を担当した。

オ 里づくりシンポジウム参加

まちづくりについて意見発表した。意見が反映される地域づくりの重要性を訴えた。

(2) 支援・協働活動

既存の公民館事業にヤング古志原のアイデアを加えることで、活動の充実をめざした。

ア 笹巻き交流会

地域の高齢者から笹巻きを学び、子どもたちと一緒に笹まきを体験した。



(笹巻き交流会の様子)

イ ピザ交流会

ピザ交流会は、会員同士の懇親のために手づくりの窯を作り、始めたものだが、それを自分たちが地域のために貢献する活動として活用した。

(3) 主催事業の実施

会員が事業を企画・運営し、主体的に活動した。

ア まちあるき&花見会

地域の史跡、自然を巡り、地域の現状や歴史に改めて向き合い、地域理解を深めた。

イ 古志原ミーティング

誰でも集い、地域の良さや課題について話し合い、交流する場所が必要だと考え2回実施した。中学生も参加した。



(古志原ミーティングの様子)

ウ 水辺の観察会

小学生・保護者を対象に、地域を流れる馬橋川の水質調査を行った。生物の観察や試薬等を使った化学的な調査を実施した。

エ 通学路清掃活動 (5月、8月)

小学校PTAと協力し、通学路の除草・清掃をし、作業を通して、地域の環境を大切にすることを学んだ。

オ 他地区青年団体との交流

他地域で活動する若者と交流することで、良い刺激を受け活動の幅を広げることができたと考えている。

(4) 地域への提言

ヤング古志原会員が地域創生総合戦略計画策定の中心となって、これまでの活動を通して見えてきた地域課題を解決しようと働きかけている。ヤング古志原の提言は次のようなもので、いずれも協議会で採用された。

ア 緑山公園の整備活用

中高生から高齢者まで地区住民が世代を越えて参加し、桜の公園を整備し花見などを楽しむ。

イ ミーティングの継続

誰でも参加でき、意見交換できる会を継続して開催し、地域の活性化につなげる。

ウ サロンの開設

誰もが気軽に集まり、飲食をしながら憩い、語り合うことのできるサロンを開設する。

エ 古志原マルシェの開催

地産地消を基にして地域産業の活性化を促すとともに、住民の交流を促進する。

4 評価と成果

地域活動に参加することで、若者に今まで関わりの無かった「地域」へ目を向けてもらい、地域への関心を高め、地域の中に活躍できる場があると感じてもらえた。また、既存の事業にヤング古志原が新たに提案することで地域活動スキルを学び、地域住民と協力することで地域を信頼し地域から信頼されるようになった。そして、古志原に若者が活躍できる場ができた。若者が、今度は「地域皆が交流・活躍できる場」をつくらうと、自分たちが学んだことを地域へ還元しようとする姿が垣間見える。この様な取り組みが、持続可能なコミュニティづくりへとつながっていくと考えられる。

5 今後の課題と見通し

ヤング古志原は、年間を通して活発に活動を続け、新しい発想で企画した事業や多世代間交流をすすめる事業などに対し、地域住民からの期待が大きくなっている。会員募集を年間を通じて展開し、徐々に増えてきたが十分ではなかった。活動をPRするとともに呼びかけを強める必要がある。

今後、ヤング古志原の活動を一層自立したものにしたい。そして、若者の主催事業を活動の中心に据え、地域で輝くよう支援を続けたい。また、将来、地域をリードする人材として成長してほしいと願っている。

(文責：主事 高橋仁)